

この仕事も随分長く続いた。

いや、世間一般で言えばまだその程度かという様な期間だが、我假放題喧嘩上等、挙句の果てに実は働かなくても生きていけるという生家の事情のせい、一切まともに働いたことなどなかった彼にしてみれば、この店に勤め始めて一年と言う期間はそれはもう大変な長期勤務になるのだ。

——ぼんやりと店内を眺めている彼には。

彼——伊達政宗という随分立派な名前の割に——は、そのような事情があつてすっかりボンクラ小僧に成り果てていた。

家に帰れば小言の煩い守役がいて、毎度毎度同じ台詞を述べるのだ。

「政宗様ももう高校をお出になられたのだからせめて少しは世間並みに働かれてはいかがか」などと。

俺には関係ねエだろとこちらも毎回鼻を鳴らして一蹴していたのだが、とうとう捕まった。そもそも働いて金銭を得る必要がないのは小言の主も重々承知ではあつたが、所謂『一般的常識を持たせるため』の『社会見学』のようなものをさせたかつたらしい。

何せ生まれは良家の嫡男だし、無駄に勉強だつて運動だつて出来る上に、程よく腕っ節もあるとき、一目置かれているとの勘違いが更に彼——政宗——の山より高いプライドを増長させるに至り、Coolが売りのちよつと変わった若者になつてしまつたのだから。

殊更守役の気になるところと言えば、苦勞知らずゆえの、実際には世間知らずの勘違い坊っちゃんだと言う事に尽きる。

その辺りを滾々と言つて聞かされ論ずようにされて、自分の知り合いの店が今人を募集しているの、そこなら気兼ねなくお勤めできるだろうと、眉間の皺が普段より二割増しになった彼にきつ目のお灸を据えられて、洪々と言う体で政宗は今、この店に務めている。

何度も同じ話を繰り返して、幾度か彼―守役の小十郎―の伝手で飲食店だのアップレルだのと点々としては短期間でバックレて、小十郎の顔を潰してきたのだ。

一番マシだったのは本屋のバイトで、一ヶ月。

アレは割りと面白かったと振り返る政宗は、でもここはもつと続いたもんなと自画自賛した。紹介時に大変嫌そうにしていた小十郎は、ここは本当はお薦めしたくなかったが、と幾度か前置いて店主だというどうも惚けた風情のある男に政宗を引き合わせた。

それでもここならば、政宗の気紛れにも我俣にもある程度対応しきれると小十郎のお墨付きで、なるほど勤めてみれば中々店主である飄々とした男は政宗に物怖じせず、時にはお前は俺のカーチャンかと思うような説教まで垂れてくる始末で、政宗に小十郎以外に第二の天敵が現れた瞬間だったのだ。

そしてそれはまんまとハマリ、政宗は日々文句を垂れながらも、この店に通勤していた。

今日もそんな一日の一コマを過ごしている政宗は、ぼんやりと然程混んでもいない店内を見ている。

「なア、佐助」

「なあに、まーくん」

それやめろつってんだろ！ Shut up! という政宗の罵声が続いて、あーそうね、と軽く受

け流したのが店主である佐助だった。

「じゃあさ、まーくんも一応雇い主の俺様を呼び捨てるのはやめようよ」

ね、と何を考えているのか分かり難い笑顔で返され、煩エ俺はいんだよと返せば、それ一般社会じゃ通じませんよとカーチャンモードで返されて、政宗はやれやれと肩を竦めた。

「煩エな。お前は俺のカーチャンか！」

毎回恒例となつてしまった店内のやりとりにも、まばらに座る客からまたやつてるよと言うような視線が二人に注がれる。常連の客などはクスクスと笑う者までいる始末だ。

「ほらほらまーくん、あちらのお客様にお水お代わり入れてきてあげて」

つたく下らねえ事で笑われちまったじゃねえかと、口の割に繊細そうな肌を淡桃に染めて、政宗は澁々と水の入ったポットを片手にお代わりいかがですかと笑いもせず客の間を歩く。

然程混んでいないとは言ったが、店主である佐助こだわりのコーヒーに手製のフード類が人氣の所謂ちよつとしたオシヤレカフェだったりするので、昼時などはこんな軽口などしてられない程混み合うのだ。

その時間帯が過ぎての所謂アイドルタイム。

文庫本片手に窓際に陣取るサラリーマンや、ちよつと普段は何をしているのかよく分からない風体の人、午後のひと時を楽しみに来ている老夫婦など。

そんな人々が今この店にはいた。

ひと通り店内を巡って待機ポジションであるカウンターに戻ってきた政宗に、佐助はおかえりと笑いかけ、ランチ何か食べたいものある？ と尋ねた。

政宗の笑う膝の裏に手を差し込み、触れれば過剰に反応する背を支え、横抱きに抱え上げた。「こちらで」

誘うように囁けば、案外素直に政宗は幸村の首元に縋り付いてくる。恥じらう姿が更に幸村を煽る。

抱え上げられながら、なア、本気か、と不安そうに政宗が呟けば、熱の籠った幸村の薄茶色の瞳が潤んで見つめ返す。

「勿論」

数分前に思った自分の浅ましさとか未成年に対する後ろめたさだとか。そんなものは綺麗に吹き飛んでいた。

——しようがないだろう。こんなに愛しいのだから。

愛していると思える相手に、告げた思いは受け入れられて、そうすれば募る恋情に比例するように欲は深まるばかりだ。それどころか、こんな風に潤んで染めて啼かれれば、劣情の波が押し寄せて来るのは当然の事だと。

言い訳がましくもそんな風に幸村は自分を納得させる。そうでなければこんなにあえかな存在に、今正に挑もうとしている獰猛な切っ先は、戸惑いもなく政宗に突き刺さるだろう。

それではいけない。

愛しい彼に、綺麗なこの人に、可愛いこの子に。

持てる情熱と愛情と真心を全て捧げて愛しむのだ。

そんな事を考えながら、行儀悪く足で襖を開けた幸村は、敷きっぱなしの布団の上に政宗を

そつと横たえた。

寒くはないかと聞けば、アンタが熱いと答えられて、幸村の薄茶色の瞳は鮎色に溶け出す。何て可愛いんだろう。どうしてこんなに愛しいんだろう。初めて会った時は無愛想な上に口の利き方さえなっていないと、内心では些か憤慨していたと言うのに。

それでも、彼と出会って僅かな時間ずつでも、一年と言う月日をかけて知り合えば——。ぶっきらぼうなのも無愛想なのも、何だかとてもいじらしく見えてきて。そのうち気になり出すのに然程の時間はかからなかった。

華奢な癖に案外丈夫で、艶々とした黒髪に、すっかり虜になってしまったあの不思議な色合いの一つ目。話せば意外に知識は豊富で、話題にも事欠かない。

政宗の寝そべる体を手のひらで行きつ戻りつしながら、幸村の脳内も、この一年を行きつ戻りつ……記憶を確かめるように、改めるようにして、手のひらに撫でて引つかかった蕾に再び口を寄せた。

あっ………！

急に濡れた感触がして、尚且つきゅつと吸い上げられて、政宗は身を振った。弓なりに背を撓らせ、あえかな声を上げる。やだ、と普段なら出そうもないような弱い声で吐息のように零せば、許して下されと、政宗の何もない胸に愛しそうに吸い付く男から返事がある。

口に含まれて喋られて、政宗は更に足の指で薄い布団に漣を作る。

だめ、あ、………！ 逃げる場所も言葉もなくて——。

「ゆき、ゆきむらア……」

ぎゆうとしがみついたその肩は熱くて。思わず名前を呼んだ。他に言葉にならない。

声を上げればみっともない程濡れて甘えた意味もない音しか出なくて。何とか甘く全身を駆け巡る疼痛を逃したくて。

「は、……ッ！ ゆき、ゆき、」

それでも言葉にならないのは。

「政宗殿……！」

涙混じりの声で政宗を覗き込んだ。飴色の瞳の持ち主が力任せにぎゆうぎゆうと抱き込むからだ、明滅する臉の裏に。ぼやけていく意識の中に。政宗は。

こんな事で、泣くなよと。

それは言葉にならなかつたけれど、絡む唇に思いを乗せて。そして、自分に言い訳をしたのだった。

——アンタのせいだからな。

結んだ唇が解けて、僅かにできた隙間に幸村の舌が入り込む。あの墨の香りも鮮やかな部屋でされたよりも遥かに激しくしつこく、舐めて吸い、噛まれて、撫で上げられて。政宗はついに行く事すらできずに舌を幸村に預けていた。

こんな^{おの}知らねえぞと思っけれど、そもそも政宗は飼犬としか口を寄せ合うような事はしたことがないので、何の参考にもならねえなど、ふ、と声を漏らして笑ったのだった。